

第八句集

『藍微塵』



## かげろふや丘に群がる兵の霊

(昭和五二年)

句集『藍微塵』は、二九句の沖繩吟詠で始まっている。沖繩戦とは名ばかりで、圧倒的な米軍の兵力のもとに、悲惨な最期を遂げた兵士及び住民たちの無念さはいかばかりであっただろうか。我々本土の人間にとっても、伊原野や摩文仁は「ひめゆり」と共に忘れてはならない代名詞であろう。同時作を少し引こう。

伊原野（いばるの）の砲煙に似て濃かげろふ

夕焼は羅刹（らせつ）の兵を天におく

雲暑し摩文仁（まぶに）死の山何呼ばむ

夕焼けたる修羅の波うつ摩文仁丘（まぶにおか）

戦後三〇年経て訪ねた沖繩の悲劇の舞台を、八束は直覚力とともに想像力を駆使して描きだす。伊原野にゆらめく濃いかげろうには「砲煙」を思い、夕焼には大軍をなして押し寄せた羅刹（らせつ…仏教の人食い鬼）を現出させ、雲までも暑く感じるような摩文仁の「死の山」にいては（救いに）何を呼んだらよいのだらうと慟哭し、同じく夕焼けのもとには悲惨な最期の修羅の波を感じとる。

冒頭の句では、その丘の陽炎に、いまだに癒されず群がる「兵の霊」を幻視する。「かげろう」にうすばかげろうの短命を感じ取り、「散った者たちの若きいのち」へ思いを寄せたのは、今は亡き鈴木詮子（俳誌「秋」創刊同人）さんであった。）

現在に身を置きながらも、風景を客観写生的に描きだすのではなく、時間軸を遡って歴史的風景を想像力でありありと描く手法を採っている。羅刹や霊や修羅という不可視の者たちも、人間の極限状況を超えたところから自然に立ち上ってくる。事実を超える詩的眞実は可視・不可視にこだわらない。しかも、いずれも詩的リアリティーがある。

穢土夕焼け十七万の霊おらぶ

の句も、想像を絶する惨劇の果てに散った者たちの叫び声がいまだに耳に届くのである。それは、かつて東京の大空襲で目の当たりにした阿鼻叫喚とも重なる風景であったに違いない。

## 常節の苞籠に挿す磯すみれ

(昭和五二年)

ちよつと洒落た句。小型のアワビのような常節を苞状になった小籠に採りためて浅瀬から戻ってきた。へとこぶしや海女も小笹もずぶ濡れて 石塚友

二の句に見るように、海女が採取するところもあるようだ。八束が見た風景の主人公も、そうかもしれない。春のおだやかな日和なのであろう。その苞籠をみると、そこには磯すみれが挿してあるではないか。このちよつとしたやさしい心くぼりが八束にはたまらなくうれいのだ。家に帰って、常節と一緒にこの葦も食卓を飾るのだろう。八束には、その晩の団欒まで目には浮かんできたに違いない。

イソスマイレは、磯に近い砂浜や砂丘に咲き、ふつうの葦よりも少し大きめ。群生することが多いらしい。この一本のイソスマイレの背景に、砂浜のいちめんの葦を想像するのも愉しいではないか。

旅には、張りつめた気持ちをほぐしてくれるこのような瞬間がときおり訪れる。その瞬間をさりげなく描きとめた八束のこの句の、心のあり方を想像しては心がやすらく。

「とこぶし」も「すみれ」も春の季語だが、あまりくどい気がしない。この句の驚きと焦点は「磯すみれ」に絞られているからであろう。「常節」「苞籠」と固苦しそうな漢字が二つ並んでいるせいも、磯すみれの「すみれ」のひらがながとてもやさしく見える。

## ひと夜母のふた夜は妻の切籠かな

(昭和五二年)

対句仕立てだが、「ひと夜は母の」となっていないことのよさに気づくまでに時間がかかった。「は」を加えてみよう。

ひと夜は母のふた夜は妻の切籠かな

どうだろう、この間延びの感じは。この措辞の確なことが八束の語感のよさを映している。対句仕立てながら、一方の助詞を除くことによって、上六の字余りとはいえ、すっきりした形と音調を得たのだ。

第二に、「母」を最初に、「妻」を二番目に持ってきたのはなぜだろう。それは、「切籠」に対して、「母」は一般的な安定した対象であるのに比べて、「妻」の方が特殊な対象だからだろう。読者は、「母」のときには無防備に懐かしさに引き寄せられるが、次に「妻」が出てくることによって衝撃を受ける。後の方に、衝撃性の強いものを置いて、次第に深く読者の中へとこの句は入り込んでゆくのだ。

もとより、一晩ずつ分けて、それぞれを偲ぶことなどありはしない。常に「母」と「妻」の両方に思いを馳せるものだろう。それでも二人への思いは、一晩ずつかけても尽きないほどのものがある。それを「ひと夜」「ふた夜」と分けて、たっぷりとした時間をそれぞれに作り出したのではないか。計らいが見え透けば、理屈っぽく感じるが、この句は自然に感じられる。このあた

りが八束の文芸的なマジックだ。

## 朝市に煮貝の匂ふ雁渡し

(昭和五二年)

「能登」と前書がある。一読、能登の朝市の風景が見えてくるような作。煮貝は作りたてか、あるいは作りながら売っているのか。いずれにせよ、あわびなどの煮貝の濃厚な匂いが、海辺の町の生活の息づかいを引き出している。さらに、「煮貝」の一語は、この朝市が海に近いことを、さらには眼前には海が広がっていることを連想させる。水平的な広がりに対して、下五では「雁渡し」という天文の事象を配して、垂直的な視野を加えた。海も広げれば、空も高くはるかまでつづく立体的な句となった。

## 吾亦紅風に呼ばれて暮れにけり

(昭和五二年)

こういう句は、あっさりと描いてあるだけに手ごわい。吾亦紅は楚々としながらも、花の奥に小さな闇をとどめてつつましく感情を抑えているような風情がある。

文字どおりにこの句を解釈すれば、吾亦紅が、風の呼び声に招き寄せられるように、そのまま日暮れに入ってしまった、となる。「呼ばれて」「暮れにけり」の間に、小さな発想の飛躍がある。

いくたびとなく舌に転がしながらこの句を味わっていると、この「吾亦紅」は亡き妻の面影ではないかと思えてくる。楚々とした野趣の中にどこことない寂しさを漂わせる吾亦紅。この「吾亦紅」は彼の世からの風の招きに素直に応えながら、そのまま「日暮れ」の中へと包まれて消えてしまふのだ。

いくぶん八束の背景に立ち入りすぎた勇み足の解釈になることを危惧しつつも、このつつましい可憐な吾亦紅の風情に、女医の仕事を控えながら八束に仕えたといわれる薄命の洋子夫人のイメージを感じるするのは、あながち誤りでもなさそうな気がしている。もちろん、一般論としては楚々たる女人を思い浮かべて自然である。

## 蓮枯れてしまへば風の笑はざる

(昭和五二年)

蓮が枯れて骨だらけになり、ふつうならばバサバサと風に音を立てて吹かれそうなものだが、八束の接した枯蓮は風が吹いても応えない。この句には

八束の自解があるからその一節を引こう。

「ともかく枯れきって泥田や水面に萎びた葉や茎の残骸がはりついて、声も出ない有様はあわれみである。枯蓮につきものの風が来ても、からからと破れ蓮が笑うこともないのである」(「俳句研究」昭和六年二月号)

この「笑わない」ところにこの句の屈折がある。その屈折を引き出すのは、もちろん八束の心情である。この句では、重苦しい気持ちを抱えて枯蓮に向き合っている。言い換えれば、八束の心の姿が諸風景の中から枯蓮を選び出し、その枯蓮を通して自らの心中を表白しているのだ。そして、「蓮」ではなく「風の笑はざる」としたところにも、この句のさりげない工夫がある。

八束の内観造型の一つの結論のような句だと思ふ。実人生を抱え込んだ句はたしかに重苦しいものがあるが、「笑はざる」という屈折を小さな断点と共にさりげなく盛り込んで、句の流れに諦観めいた影を引き寄せている。

### 秋晴や口淋しさの茶飲み虫

(昭和五二年)

天高く澄み渡った秋晴れの日、八束はどこかさびしい思いにとらわれている。それは胸中ではなく、口の中が淋しいのだ。いや、そうであるかのようには先ほどから作者はお茶ばかり飲んでいて、という句だろう。茶飲み虫とは、言うまでもなく、お茶ばかり飲んでいて八束の自嘲。広やかな秋晴れに、部屋にこもって茶飲み虫に「変身」してしまったかのような、ちよつと滑稽味のある自嘲だ。

八束のお茶好きはつとに知られたところ。八束の自宅を訪ねると、奥さまにお湯を持ってこさせると、あとは自分で玉露や煎茶を八束流に淹れてくださったものだ。その慣れた手つきは、風格と共に自然に一人愉しむような気配があつて、ある意味では先妻を亡くした後の、勝手気ままの一人居の間に、自分を慰める時間の中で自然に身についたものなのかもしれない。そんな一抹の寂しさも漂わせていた。

### 煮凝や胸にはいつも風の音

(昭和五三年)

集中、私の一押し之作。一人晩飯の卓袱台に坐って、煮凝りをつまみながら外の風の音に耳を傾けているような気配の句。戸外のヒューヒュー音を立てている北風は、そのまま八束の胸中をすぎていくものでもあった。昨日の、口淋しさに対して、こちらは胸淋しさ。八束の胸の中には、かの青春の日以降、いつでもどこかに薄暗い風が吹き廻っているのだった。「いつも」のひらが

な表記あたりが殊にさびしく澄んで感じられる。

これにも八束の自解があつて、句の成立の背景が綴られているので引いておこう。

「(煮凝や)の作はしかし、どこかで深刻ぶつているところのある句かもしれない。それはその前年の秋に、長く知遇を得て親しかった作家の和田芳恵先輩が急逝して、私の胸の奥にはまたただならぬ風が吹いていたからである」(「俳句研究」昭和六一年二月号)

尚、和田芳恵の墓は私の故郷の茨城県古河市にある。何かの縁というものであるう。

#### 【仲見世の伊藤黄雀翁】

切山椒買うて仲見世書肆に寄る

(昭和五三年)

ちよつとわき道に入ろう。この句には、「伊藤黄雀兄は三十余年来の俳友なれば」と前書がある。この伊藤黄雀さんは、私を石原八束に引き合わせてくださった恩人でもある。学生するとき、浅草は仲見世の奥の料亭に家庭教師に通っていたことがあつた。バスで少し早目に着くと、雷門のとつときの清水屋書店に入って時間をつぶした。店の手前には浅草らしいグラビア雑誌が目を引いたが、私の興味はいつも店の奥のうす暗い棚と本箱にあつた。最初に目にとまったのが俳句雑誌「雲母」で、求めてすぐに投句した。そのうち、年季の入った奥の本箱の本は、売り物ではなく愛蔵の句集であることが分かつた。

店主は白髪で目もとの柔和な小柄な七十翁であつたが、それが伊藤黄雀さんだつた。何回か「雲母」に投じた句を見てくださつて、「俳句がお好きなようなら、東京には石原八束さんがいるから訪ねてみるといいよ」と勧めてくださった。「俳句」に発表された五十句に惹かれて「秋」の句会を訪ねたのはそれから間もないことであつた。

伊藤黄雀さんは「秋」「雲母」の同人であつた。下町風の、浅草らしい洒落た遊び心の佳品をお出しになつた。あるとき黄雀さんは昔西東三鬼にも師事したことがあつたこと、三鬼は太っ腹の人物だったことなどをぼつりぼつりお話しくださった。いずれも懐かしそうな柔らかな声であつた。三鬼の弟子だつたときの俳号も黄雀であつたかどうか聞きそびれてしまつたが、いずれ機会があれば辿つてみたいと思つている。

それはそうと、学生の私はこの句で「書肆」という言葉を覚えた。「書店」というよりも引き締まって志操の深いような雰囲気を、文字づらと音韻から感じたものだ。八束がこの「書肆の友人」を詠んだ句は晩年にもあるが、またその折に触れることにしよう。この古風な雰囲気の「書肆」に花びらのよ

うな彩りの切山椒が、なんともやわらかく感じられて、家庭教師の浅草通いは心豊かなものになっていった。

## 月夜なる千珠の辛夷吹かれたつ

(昭和五三年)

三好達治が「辛夷の花は天上へ」と詠んだ辛夷の花は、もちろん八束の好尚に叶うものであった。春に先がけてひらき、清楚でみずみずしい光を返す辛夷の花。この句では、月下に、大木の辛夷の花が風に吹かれている。

八束は白い色が好きだ。この句も、月の蒼白い光のもとに辛夷の白い花がさざめく。昼間ではなく夜の辛夷を捉えたところに、新しい世界が現出した。死に近い月の世界の光に照らされて、生の象徴でもあるかのような辛夷の花が中空に光を返す。大きなのちを詠み込んだ幻想的な句だと思う。

## 十万の海猫吹雪き舞ふ天売崖

(昭和五三年)

「天売島にて 五句」の前書がある句の第一句。天売島はまだ訪ねたことがないが、「天売崖」という表記からは、天に聳えているかのような気配を感じる。急峻な崖は他の動物から攻撃される危険性が少ないので、海猫の棲み処には好都合なのだろう。その絶壁に、十万羽もの海猫が雪のように舞う。いのちを持ったものが十万も飛び交うのだから、壮観であろう。深谷雄大さんは『石原八束百句』の中で、この句を「離島に乱舞する海猫の大群を、肺活量いっぱい捉えてみせた」と表現されている。この断崖に展開されることもごとした光の乱舞の世界がまるごと一つの生命宇宙をなしている。

実際の風景の中にも、人智を超えるような壮大な自然の舞台がある。時に幻想的な句風に踏み込む八束だが、こういうときは眼前の生命宇宙を言葉に定着させようと現実に向き合って腰を据える。

## 千島風露咲いてオロロン鳥孵る

(昭和五三年)

「オロロン鳥」を調べるためにインターネットで検索したら、いきなり「オロロン鳥」と呼ばれているウミガラスは絶滅の危機」という文字が目飛び込んで驚いた。和名はウミガラス、その声がオロロンと聞えるので「オロロン鳥」と呼ばれるとのこと。チドリ目ウミスズメ科の海鳥で、写真で見

るとちよつとペンギンにも似ている。日本では、現在天売島だけで繁殖しているとのこと。その貴重な鳥が絶滅の危機に瀕しているのだそうだ。一方、いかにも北海道らしい名前の千島風露は、楚々とした五弁の薄紫の花。花がひらくのはやはり初夏あたりだろうか。

俳句の方に戻るが、八束が訪ねたのは、オロロン鳥が減少し始めた頃ということになる。この句には、卵から孵ると千島風露の花が雛の目に映るようなやさしい雰囲気が満ちている。こんな平安な風景がこの島から永久に消えてしまうのだろうか。残念な思いがする。

## 血をすするごと花に寄る天の蝶

(昭和五三年)

北海道の天売崖に行つて鳥を詠んだかと思うと、今度は台湾に出かけ蝶を取材する。八束の好奇心と行動力は限りなく大きい。この句は「埔里の谷 十句」の中の第三句。ドラキュラではあるまいし、何も血を吸わせなくてもと思うが、蝶にしてみれば花の蜜を吸うのは、人間が血のしたたる牛肉を食べているようなもの。それにしても何かうつくしくて妖しい雰囲気のただよふ世界ではないか。「天の蝶」とは仰ぎ見るような位置に蝶が行動していることを仄めかしている。この一句だけでは不明だが、この花の色が真紅であることはすぐ前の句の(鳳凰木(ほうわうぼく)真紅に咲けり蝶翔てり)にある通り、想像できる範囲ではある。赤い花だから血をすするように感じたというとなにか安っぽい種明かしをされたようであつたが、つかりするが、それほど鬼気迫る風景なのかもしれない。花の蜜を吸いに来る蝶も、ふつうのモンシロチョウなどではなく、熱帯特有の妖艶な蝶かもしれないなどと想像してみたが、事実はどうであらうか。蝶に詳しい人に出会ったら、こんど聞いてみよう。

## 溪流に多淫の蝶の目覚めをり

(昭和五三年)

昨日のドラキュラ蝶につづいて、今度は多淫の蝶。なんだかへんな気配の蝶追いになってきた。大丈夫ですか、八束先生。などという心配はいらない。野生の蝶にも、もちろん人間同様多淫になって誘う誘われの世界があつて当然。自分が人間ではなく蝶の姿にでもなつて周りの蝶を見渡せば、こんな雰囲気も伝わってきそうではないか。溪流というのは人間にとっては涼味にすがすがしさを覚える場所だが、蝶にとってはそのきれいな空気と適度な湿度と気温は情欲(?)を引き出すに好都合の環境なのかもしれない。多淫を

詠んで下品にならないのが、文芸を意識した八束の句の好もしいところ。「目覚めをり」という擬人化がこの蝶の妖しさを確実に定着させている。

### 谷の蝶紫光を放ち交みをり

(昭和五三年)

前回の〈溪流に多淫の蝶の目覚めをり 八束〉に続く作。谷間のせせらぎに蝶が交合しているさまを捉えただけの句だが、「紫光を放ち」という表現がうつくしい。紫色の蝶なのであろうが、たとえば「紫雲」の語に見るように、古来「紫」は瑞祥の気をまとう。この句では、小さな生命体が交合という生命維持の営みを通じてながら、光を自ら生み出し小世界を作り上げている。せせらぎの光を浴びながら、その光を妖しく跳ね返しているような紫の交みの光。蝶のつがいを一組描き出しているが、実際には群をなしているかもしれない。その風景もこの世の時空とは思えないような神秘的な彩りであろう。現実の風景の中から引き出される幻想的な生命美に、我々もただ酔い痴れるばかりだ。ここには従来の和風の「てふてふ」とは異なった強烈な生命の光が満ちあふれている。

### 蝶騰る水をいのちのきらめきに

(昭和五三年)

〈溪流の飛沫に蝶の彩たちぬ〉と〈羽ばたくは煙るがごとし鳳蝶〉に挟まれた句。このあたりの作は、落ち着いた作者の視線を感じる。水辺の蝶という風景は格別斬新というほどではないかもしれないが、風景に新しみが希薄であれば、その中に独自の文体を作れば表現的な新しさが得られる。この句などは、その好例であろう。「水をいのちのきらめきに」というフレーズは観察の目と同時にしずかな思索的な時間を感じることができるといえる。ある意味では蝶の心理を解き明かそうとしたような感じの句になっている。蝶の生命の根源的な力はどのようなように生まれてくるのか、その契機を飛び立つ接点である「水」のきらめきに求めたのだ。言葉はひらがなにしておさしく単純に書き流しているように見せているが、その裏にこもる八束の思索性を辿るのも興味が尽きない。

### 水鏡に蝶あるときは彼方に炎

(昭和五三年)

「日月潭」との前書きがある。日月潭は、台湾南投県魚池郷にある大きな

湖。湖の名は、北側が太陽、南側が月の形をしていることにちなむ。日月潭に浮かぶ拉魯島は原住民の邵族の祖霊が宿る場所ともいわれる。「双潭秋月（日月潭の秋の月）」は台湾八景のひとつに数えられている。

と、ざっと下調べをした上でこの句に戻ると、脳裏に浮かぶのは次のような風景だ。

どこまでも澄みわたった湖の水際に蝶が舞っている。その蝶が水に映った瞬間、湖のはるか彼方に炎が燃え立つ。手前の蝶の色彩に触発されて、湖の沖に炎が見えたのだ。その炎は、具体的には夕焼けかもしれないが、拉魯島が原住民の聖地であることを含み考えれば、その島の聖なる祖霊の火でもよいだろう。

発想の豊かな句だが、この句の難点としては、「日月潭」との前書きがないと「拉魯島」の聖なる火のイメージが生まれにくい点であろう。弟子の身としては、なんだかもったいないような思いがする。

実は、この手前の火に触発されて沖に火が立ち上がる風景は、後に『白夜の旅人』のフィンランドでの作に再現する。（火を焚けば湖心の燃ゆる白夜祭）の句だが、この映発されて移動する炎のイメージは八束の独特な感覚かと思う。

### 祭壇の蛮族の首蝶が舐める

（昭和五三年）

ぞくぞくつとする句。いまもこのような祭壇が残されているかどうか不案内だが、部族という単位枠が社会的機能を發揮していた時代ならば、台湾に限らずこのような風景があってもおかしくはなからう。この首は祭の生贄として供えた首であろうか。

八束のこの句は、細部に拘らなくても主題は読める。自然界のはかなく見える「蝶」が人間界の「首」を舐めることよって現出する一種倒錯的な気配。原始宗教の在り方に触れるような現代では禁忌の部分が、凶らずもたった一匹の「蝶」によって開扉されてしまった驚き。時間軸を一気に遡ってしまったような不気味な気配が濃厚にただよう句になった。八束にとって異色の句が残った。

### 絶景といふ宙吊りの鳥蝶

（昭和五三年）

この句には「太魯閣（たろこ）峡谷」との前書がある。「といふ」の措辞がややゆるく置かれている。「といふ」を「というにふさわしい」の意と解釈す

れば、句意は「宙吊りの蝶」それは絶景である、とでもなるうか。前書の助けを借りた解釈かもしれないが、大きな峡谷に宙吊りになっているように見える鳥蝶こそ絶景というにふさわしい、というのだ。一方、「といふ」を「と声を発している」の意と解釈すれば、読者には、この鳥蝶自身も逆さまになりながら峡谷を眺め渡して、「絶景かな」と感嘆しているようにも感じられる。私自身は、どちらの解釈も重なって感じられる。つまり、最初は鳥蝶を見上げていた八束の視点は、やがて蝶の中に吸い込まれていって、蝶の視点から改めてものを感じ感嘆のことはを発したのだ。八束は、自らが蝶自身になりきっての視野を読者の前に晒したかったのではないか。大きな谷の中では点景にすぎない鳥蝶であれ、それぞれが「絶景」を感じ宇宙を感じながら生きていく。そのような自然と人間の生命感の接点を提示したような句ではないか。

### 穴あきし胸を埋めむ落葉焚き

(昭和五三年)

若くして結核を患った八束の過去をしみじみ振り返るような作。落葉焚きのけむりが胸の洞を埋めるように思われるとの意であろう。もちろん、けむりではなく、胸の洞を落葉焚きの炎が占めているイメージを受け取ってもよいだろう。「胸を埋めむ」との表現は、当時結核をした人ならば暗黙の了解事項かもしれないし、あるいは若き日以来の隙間風吹く胸中の思いを表白したものかもしれないが、ともあれ、落葉焚きをしながら自分の内景を描こうとした内観造型の句となっている。見方によっては、胸の洞に青空を嵌め込んでもそこに焚火の炎が上がっているような、シュールレアリスム的な風景にも見えるが、それは私自身の偏った好みかもしれない。

不思議なのは、この句は「穴あきし胸」を詠んでいるのに、全体的なトーンは必ずしも深刻ではなく、むしろどこかにやわらかな諦観をまとうているように感じられることだ。遙かな時間を経てきての「いま」への自愛のようになしずかな心の持ち方が感じられるといってもよいだろう。「俳句」誌上で、私が最初に出合った八束の印象句であった。

### ろざりおのさんたまりあ残り菊

(昭和五三年)

前書に「五島列島福江島堂崎教会（日本最古の天主堂）」とある。こういう句はどのように解釈したらよいか戸惑う。「ろざりお」や「さんたまりあ」を説明し、福江島堂崎教会の由来を説明しても、それではどうにもならない。

隠れキリシタンの悲劇について触れて「残菊」のもつ意味を解いても、この句を味わったことにはなるまい。祈祷のようなやさしい雰囲気が立ちのぼる口唱性の韻律を、しずかに味わう以外にならう。この句の持ち味は表現された視覚的風景にあるのではなく、「あ」音と「お」音に満たされた音韻の奥にある象徴性ともいふべき音の編みだすイメージにある。夢幻の奥にしばらく引き込まれて、ふと現実に戻ると、足もとに「残菊」が目にとまるのだ。

### 鷹孤つ玉石さまをめぐりをり

(昭和五三年)

前書が長いがこれがないと何のことか現地以外の人には分からない。以下に引こう。「小値賀(おじか)島の斑(まだら)島に天然記念物のポットホールあり。荒磯の甌穴にさしこむ汐水により穴中の玉石を動転させて鳴る。何かに似たる相珍妙なり。島民により玉石大明神として祀られてゐる。七句」すなわち、玉石さまは甌穴(おうけつ)を大明神として祀ったもの。島の生命の根源として崇拜を集めているものだろう。私自身は、佐渡の甌穴を何度か見に行ったことがある。これほどの珍妙なものではなかったが、小ささまなものがあって、それぞれに磯の隠れ処めいた風情がおもしろかった。この句は、その玉石さまを、上空で鷹が旋回して守り通しているように描く。そこにこの句のユーモラスな味わいがある。句の構成としては、悠々たる鷹の上空の旋回と海辺の甌穴の底の微小な石の回転とが呼応するように出来ていて、垂直性の中に大小のコントラストを抱えた構図となっている。

### 登り窯の洩れ火のはねる雪夜かな

(昭和五三年)

登り窯は蛇のようにうねうねと山などの斜面に沿って作られた長い窯。ところどころに小さな火口があつて、ここからも薪を投げ入れるようだ。桃山から戦後くらいまで使われていたが、現在では少なくなった。しかしながら、薪を使うので釉薬の変化が焼き物に現れて独特の味わいになる。そのため、いまでも登り窯を残しているところがある。

八束の句は、登り窯の火がところどころ洩れ出て、遊ぶように雪夜に跳ねていると表現したもの。雪夜に火が鮮烈な印象を残す。ロマンあふれる幻想的な風景でもある。

この句においては、文語体だから本来ならば「はねる」は「はぬる」にならなければならないが、洩れ火のあそぶさまに沿った口語体の「はねる」の

語感を優先して選んだのであろう。このあたりがリゴリズムの作家でありながら、音韻に敏感で柔軟な八束のよいところだと思う。

身をゆすりゐてかなしみの積る雪

(昭和五四年)

七五五の文体に、「み」と「ゆ」の交互の再現が加わって、句全体に音律的なくつろぎが生まれている句。しかしながら、句の内容は歳月と人生への思いが重なってむしろ重い。「身をゆすりゐて」には、ユーモアとも自嘲ともとれるような諦観が覗いている。この世に貧乏ゆすりならぬ「身ゆすり」をしているうちに、悲しみもしんしんと雪のように積もってきてしまうというのだ。八束を知る人にとつては、「身をゆする」にこの頃の作者の熊のように大きかった体型を思い浮かべて、なにやら懐かしくもある。初期の作の、(パイプもてうちはらふ万愚節の雪(『雪稜線』)と(うちまたに落葉を踏んでなまけ熊(『操守』)とをミックスしたような味わいの句ではないかと思うが、句のゆとりにおいて二作の融合された熟成の歳月を感じる。尚、同句集には(膝ゆする身ぐせの寒し鬼ひとり)の句も収録されている。

寒菊や風の中なる鏡山

(昭和五四年)

「肥前唐津にて」との前書があるコンパクトな句。この句の要は「鏡山」であろう。虹の松原と唐津湾を見下ろすこの鏡山といえ、別名「領布振山(ひれふりやま)」で知られる佐用姫の悲恋の物語の舞台でもある。百済救援に発つ船の同伴狭手彦に向かつて、山の上から領布を打ち振りつづけ、ついには石になってしまったという伝説を偲ぶとも言おうか、上五の「寒菊や」に八束の詠嘆が感じられる。だが、中七以下は、主情に流されることなく、むしろ端的に「風の中なる鏡山」と叙して、あとは読者の想像にゆだねた。「鏡山」の「鏡」がきびしく澄みきって佐用姫の心中を映しているような気配もある。いつまでも「風」の中の佐用姫の悲嘆が耳について離れない哀切な句だ。

藍微塵死が見えてきぬふりかへる

(昭和五四年)

藍微塵が勿忘草の別称であることは以前に触れたので略。この句を読んで想起するのは、(死が見ゆるとはなに)とぞ花山椒 齋藤玄(昭和五五年)

の絶唱であろう。製作年代的にも近いが、玄が「花山椒」を下五に据え、八束は「藍微塵」を上五にあしらったのは対照的でおもしろい。

ちなみに玄の「花山椒」の句の「なにごとぞ」とは、俄かな死の到来に対して驚き怯えているのではない。むしろ「はや、死が見えるとは推参な、と、死を叱咤する最後の怒り（中略）憤怒する気力はすでない。ただこの不条理を、多少の微笑をもつて叱りおくのである」（近藤潤一）との解釈を支持したい。玄は生前、「花山椒みな吹かれみなかたちあり」という作を詠み、これは袖夫人の愛誦句ともなっていた。そのことを踏まえて、この世に残る妻への粹な手向けの句を遺したのである。

八束の場合の、「死が見えてきぬ」は、これに比べたら大分余裕があるろう。むしろ、八束の敬愛する詩人・三好達治への存問の気持ちに底に流れているような気がする。藍微塵の小ぶりで淡々とした風情と色彩は、達治の悲恋の相手である萩原アイへの思慕と運命を仮託したものであるろうが、同時にそれは達治の美意識の象徴のようなものであるろう。それを八束も自分の運命の果てに重ねたいとの思いがあったのではなからうか。三好達治の「萩原アイ」に代わるものは、八束の場合、難病に約十年苦しんだあげくに早世した先妻「洋子夫人」への思慕であろう。その思いを、大分近く見えてきた自分の晩年及びその果ての「死」を視野に収めながら、「藍微塵」という淡如たるはかない光に収束したいとの思いがひたすら募ったのことかと推察するが、句の背景はあくまで余分なことかもしれない。

むしろ、この句に沿って一句独立としての読みが求められよう。そうであれば、むしろ、名作へかたまつて薄き光の董かな 水巴『白日』の洗練された純粋な美意識への傾倒に近いものを感じとるべきであろうか。「可憐な風趣」（八束）の藍微塵に「董」のような光が見えだしたとき、「董」の句が絶唱へうすめても花の句の葛湯かな 水巴と同年に詠まれたことに思い至れば、おのずと八束の胸中にはこの「董」と等価にある「澄んだ光を思わせる死」への憧れがちらついたにちがいない。ふだん振り返る暇もなく過ごしてきた心の底の思いを、遙かに先取りするような「藍微塵」の光が突然見え始めたとき、さすがの八束もこれまでの半生を思わず「ふりかへる」のだった。まるで、死神が後ろに迫ってきてはいないかを確かめるように。それは、齋藤玄がすでに眼前に姿を現している「死」と正対して、「多少の微笑をもつて叱りおく」という悟りに比べると、まだ日数的な余裕があるようにも感じられるのだ。

## 第八句集『藍微塵』